

# TUFS 言語モジュールと言語変異

川 口 裕 司

## TUFS Language Modules and Language Variation

KAWAGUCHI Yuji

This article describes the history, features and functions of the TUFS Language Modules, a multilingual e-learning system which is unprecedented in the world, in which the English Modules are included. Emphasis is placed on the importance of developing the modules of non-standard varieties of languages, based on sociolinguistic variation analyses, in addition to those of the “standard” varieties. The French modules are taken up here as examples to describe the differences in vocabulary, pronunciation and syntax of Quebec French, Midi French and Swiss French, in contrast with “Standard” French of France. Furthermore, I argue that socio-stylistic variations exist even in so-called “standard”, varieties giving an example of the occurrence of the simple negative “...pas,” as opposed to the prescriptive negative “ne...pas,” in all four French varieties.

キーワード： TUFS 言語モジュール、言語変異、標準語・共通語、言語規範

### はじめに

東京外国語大学では 21 世紀 COE プログラム「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」(2002–2006 年度)<sup>1)</sup> の事業の一環として多言語マルチメディア教材『TUFS 言語モジュール<sup>2)</sup>』を開発してきた。『TUFS 言語モジュール』は、多言語の学習用コンテンツが共通の枠組みで扱われているユニークな教材とすることができる。同 COE プログラム終了時点で、英語、ドイツ語、フランス語、スペイン語、ポルトガル語、ロシア語、中国語、朝鮮語、モンゴル語、インドネシア語、フィリピン語、ラオス語、カンボジア語、ベトナム語、アラビア語、トルコ語、日本語の 17 言語におい

て会話モジュールが公開されていた。その後も二つの文部科学省特別教育研究経費、「世界の「言語・文化・地域」理解のための最適化教育プログラム」(2007-2012年度)および「学習の可視化・多様化を指向したe-Learning教育システムの開発と教育の高度化」(2013-15年度)の補助金を受け、経年順にタイ語、ヒンディー語、ウルドゥー語、ビルマ語、ペルシャ語、イタリア語、ベンガル語、チェコ語、ポーランド語、マレーシア語を加え、2015年2月現在で、27言語の会話モジュールが公開されている。本学の言語文化学部で教授される27言語の全ての会話モジュールが完成した。

『TUFUS 言語モジュール』は、21世紀COEプログラムの言語情報学拠点が目的として掲げた、「情報工学を基盤として言語教育学と言語学の統合を実現する」教材として開発された。言語情報学の創成によって、① コンピュータ技術を駆使した外国語教育の先端化、② シラバス論や談話分析の研究成果を活かした教育の効率化、③ 言語理論を背景にした教育コンテンツの高度化、を実現することがプログラムの主眼であった。「言語モジュール language modules」の発想は、言語学のいくつかの学派、とくに生成文法と認知言語学(心理学)において議論されてきた「言語のモジュール性 modularity of language」の仮説に着想を得ている。その考え方の源泉は、Jerry Fodorによる *The Modularity of Mind*, 1983, MIT Press に遡ることができる。Fodorのモジュール仮説では、人間の心を完全につながったネットワーク構造と考えない。コネクショニズムの仮説を人間の言語使用に適用するのは誤りであるとする。人間の言語使用が完全なネットワーク構造であるならば、人間の言語処理の過程は、その人がその場で得る視覚情報や社会的状況、さらに過去の経験などの歴史的知識から少なからぬ影響を受ける可能性がある。Fodorによれば、言語処理の入力・出力のシステムは、むしろ機能ごとにモジュール化されており、各モジュールはその固有領域が決まっており、情報が外に浸潤しないようにカプセル化されていると仮定する。このモジュール仮説は、その後、大いに批判されることとなった。批判の根拠は、① 統語論と意味論の間には相互影響が広く見られること、② 言語能力が孤立化したブラックボックスになってしまうこと等であった。これらの批判には一理あると考える。しかしなが

ら、TUFS 言語モジュールを構想した段階においても、そしておそらく今もなお、モジューラ仮説の云わば根幹部分の重要性は失われていないと考える。とくにモジュール性の基本的性質である、① 機能別に分かれた各モジュールの領域はそれぞれ固有であること、② モジュール間の情報の遮断性がある程度実現されていること、③ 入力系をインターフェースとして中央系にアクセスすること、これらは人間の言語処理の本質に関わる仮説のように思われる。上述の仮説を土台にして構想された「TUFS 言語モジュール TUFS language modules」では、言語処理に4つの異なるシステムを想定する。① 音声信号処理系、② 語彙情報処理系、③ 文法規則処理系、④ 語用論的文脈処理系である。TUFS 言語モジュールを利用する学習者のことを考慮し、より一般的な名称を用いて、4つのモジュールは発音モジュール、語彙モジュール、文法モジュール、会話モジュールと命名された。もちろん言語処理と言語学習は本質的に同じ過程を経るわけではない。また、各言語モジュールが排他的にただ一つの言語処理系だけを利用するわけでもない。とはいえ、各モジュールはそれぞれ異なる言語処理系を優位的に活用するためのモジュールとして考案され、各モジュールは意図的に固有の言語処理系を保持しながら互いに独立しているという仮説の下に設計された。このように TUFS 言語モジュールは、コンピュータ技術を基盤とし、言語学におけるモジューラ仮説を言語教育の中に応用しながら、コンピュータ科学と言語学と言語教育学という3つの分野の有機的な統合を実現しようとする試みであった。

## 1. 会話モジュールと言語機能

会話モジュールは TUFS Kids 英語<sup>3)</sup>を除いて、大学生が初めて当該言語を学ぶという目的で開発された。会話モジュールにはレッスン番号は存在しない。代わりに40の言語機能が設定されている。その開発工程は以下のものであった。まず最初に、日本語の既存教材と Wilkins (1976) の機能リスト、および朝鮮語と中国語における機能リストが横断的に分析された<sup>4)</sup>。次に、系統が異なるスペイン語、ドイツ語教材の調査を行い、その結果、71の言語機能リストが作成された。そのリストを Blundell et al. (1982) の

機能と比較し、共通するものを優先しつつ、全体を整理することで40機能が選定された<sup>5)</sup>。他方、2001年度に学部教育研究特別経費(競争的経費)の補助を受けて、「外国語自習システム開発のための基礎的研究」として、Web教材のモニター調査を実施した<sup>6)</sup>。結城(2003)は、同モニター調査の結果も生かしつつ、40の言語機能をさらに3種類に下位分類できるとする<sup>7)</sup>。第1の分類は言語機能の性質によるものであり、第2は言語機能が必要とされる段階による分類であり、最後は言語機能が必要とされる場面による分類である。こうした3つの下位分類を利用すれば、①「言語機能を学習するためのシラバス」、単純な機能から複雑な機能へと②「段階的に言語機能を学習するシラバス」、③「場面設定と言語機能を組み合わせるシラバス」のように、それぞれの学習目的に合わせたシラバス作成が可能になる。

たとえば、「言語機能を学習するシラバス」は4つの機能グループで構成される<sup>8)</sup>。第1に、相手と言葉を交わすことを主な目的とする交話機能がある。挨拶をする、感謝する、自己紹介する、さようならを言う等がこの機能グループに含まれる。第2に、相手との情報のやりとりを主な目的とし、コンテキストが重視されるタイプの伝達機能がある。これには2つの下位グループを設定できる。1つは、特定の文脈における事物・経験・数字などについて、具体的な情報を求め、その回答を直接的に得るタイプである。会話モジュールの機能で言うと、金額・程度・時間・数字・場所・特徴についてたずねる、比較するがそれにあたるであろう。他方、特定の文脈に依存しつつも、順序について述べる、状況についてたずねる、理由を述べる等のように、情報をメタ言語的に伝達するタイプも考えられる。第3の機能グループは、相手に情報を伝達することで、相手に何らかの事行の遂行を働きかける機能を表す。注意をひく、依頼する、しなければならぬと言う、禁止する、指示する、しないでくれと言う、助言する、要求する等が、この機能グループに入る。第4の機能グループは、相手に話し手の見解や気持ちを伝達する主観的表現機能を表す。意見を述べる、好きなもの・好きな行動について述べる、希望を述べる等がこの機能グループに分類される。

「段階的に言語機能を学習するシラバス」も4つの機能グループで構成される。最も単純な言語機能には、挨拶をする、自己紹介する、さよならを言う等がある。次の段階には、金額・時間・数字・状況等についてたずねる、がある。さらに第3段階の言語機能には、自分の意見を述べ、予定・理由・希望を述べる、好きなもの・行動について述べる、が考えられる。最後に、相手と共同で行動するというような、より複雑な言語機能がある。たとえば、注意をひく、人にものをあげる、条件をつける、提案する、依頼する、妥協する、指示する、しないでくれと言う、しなくともよいと言う、招待する、助言する、要求する、人を紹介する、がそこに含まれるであろう。

「場面設定と言語機能を組み合わせて学習するシラバス」の場合、挨拶する、感謝する、自己紹介する、あやまる、さよならを言う等の言語機能は、最も基本的な場面設定を表すと言えよう。他方、時間・数字・手段・場所についてたずねる、禁止するの言語機能では、たとえば道路や交通機関の場面設定を行うことができ、金額・特徴についてたずねる、比べる、要求する、希望を述べるでは、商店の場面が想定され、経験・程度についてたずねる、意見・理由を述べる、提案する、指示する、助言するの言語機能では、教育現場や仕事場の場面が考えられる。

## 2. 会話モジュールと標準語・共通語

全ての会話モジュールには、当該言語の使用地域と人口について述べたページがあり、同ページには「ここで学ぶ〇〇語」という説明文がある。2014年6月の

Français	
	フランス語
フランス語の使用地域と人口	
フランス本国のみならず、ヨーロッパの他の国々の一部でも母語として話されています。またアフリカ、アメリカの大陸や島々、およびアジアにも用いられている地域がありますが、その使用の歴史や様態はさまざまです。全世界の話者人口は約9,000万人と推定されます。	
ここで学ぶフランス語	
ここでは現在規範的とされている、ラジオやテレビで用いられるような標準的フランス語を学びます。吹き込み者は男性・女性いずれも南仏出身で、パリで教育を受けています。フランス語は各地で多様な地域的特色を持つ方言が話されていますが、標準的フランス語はフランス国内のみならず、他のフランス語圏でも同様に適用するものです。	

時点で公開されていた24言語について、上記の説明文を調べたところ、20

言語で「標準語あるいは共通語」という用語が用いられており、かつ多くの言語が地理的特徴を利用して標準語を定義しようとしていることがわかる。地理的特徴について触れた部分を列挙してみよう。

「ドイツ東中部のドイツ語が基礎となり」、「スペイン中央部とその周辺地域で話されている」、「モスクワおよびその近辺で用いられているロシア語が基となり」、「北京方言を中心とする中国北部方言を基礎とした「普通話」、「ソウルの言葉を土台にして作られた」、「マニラ、及び、その近郊で話されている」、「首都バンコクを中心に話されている」、「首都ヴィエンチャンの発音が標準的であると認められつつあります」、「ハノイ方言の発音」、「エーヤワディ河沿いのデルタ地域で話される」、「北インドやパキスタンで使われる」、「テヘラン標準語」、「東京およびその周辺で使用される」

標準語と共通語の一般的性質と考えられる通用性について言及している言語も多い。

「フランス国内のみならず、他のフランス語圏でも同様に通用する」、「スペインのみならずどこでも通用する」、「ロシア国内をはじめ、世界各国のロシア語話者に広く通じます」、「世界中の中国語話者に最も広く通じる言葉」、「インドネシア全体で使えるものです」、「タイ全国で通じます」、「ビルマ語の通用する地域であればほぼ通じます」、「ここで学ぶベンガル語は基本的にインドでもバングラデシュでも問題なく通用する」、「日本国内どこでも通用します」

唯一の例外はアラビア語である。ダイグロシア<sup>9)</sup>の典型と言われるアラビア語では、「(1) 書き言葉や改まった場面での話し言葉として全アラブ世界で使われるフスハーと、(2) 各地の多様な方言(アーンミイヤ)」がある。日常的な会話を考えると会話モジュールは後者のアーンミイヤを基にすることになるだろうが、それはいかなる意味においてもアラビア語の標準的変種

たり得ない。興味深いことに、アラビア語については、2003年12月にエジプト方言アラビア語の会話モジュールが開発され、2006年11月にシリア方言アラビア語、そして2013年3月になって、ようやくフスハー（正則）アラビア語の会話モジュールが完成したのである。いずれにしても、大学生が初めて学ぶ言語なのであるから、標準的な変種を学習の対象とすることは至極当然のことと言える。

### 3. フランス語会話モジュールと言語変異

会話モジュールにおいて、標準語モジュール<sup>10)</sup>以外についても言及する必要があることは、言語モジュールの開発当初から議論されていた。なかでも地理的な言語変異は文体的な言語変異とともに、学習者が標準語モジュールを学んだ後に学習すべき重要なテーマであると言える。そうした試みは、まず、現在でも地理的な言語変異を多く保持しているドイツ語から始まった。2008年7月にウィーンのドイツ語とチューリッヒのドイツ語が開発された。続く2008年から2009年にかけては、北京の普通話、蘇州の普通話、台湾の普通話が相次いで公開された。そして2009年1月にケベック・フランス語<sup>11)</sup>、2012年にスイス・フランス語<sup>12)</sup>と南仏フランス語<sup>13)</sup>がそれに続いた。以下では、フランス語会話モジュールについて、標準語モジュール以外の3つの会話モジュールの中に、どのような変異形が現れるのかを詳しく見る。

#### 3.1. 語彙的変異形

地理的な変異形のうち、最も数が多く、かつ多様な姿を提示するのは語彙的変異であろう。

##### 1. ケベック・フランス語<sup>14)</sup>

achalandé 混んでいる、aréna スケートリンク、atocas クランベリー<sup>15)</sup>、avoir du pain sur la planche やるべきことがある、avoir encore les deux yeux dans le même trou まだ眠い、balayeuse 掃除機、banc de neige 雪だまり、barrer 鍵をかける<sup>16)</sup>、bleuet ブルーベリー、boucane 煙<sup>17)</sup>、

brassée de lavage 洗濯物、Ça te tente? どう興味ある?、capoter 慌てる、cellulaire 携帯電話、cenne お金<sup>18)</sup>、chalet 別荘、char 車、chicane 言い争い、chum 彼氏・彼女<sup>19)</sup>、coudon やれやれ、écraser 禁煙する、embarquer 乗り物に乗る<sup>20)</sup>、en arracher 苦勞する、en autant que もし～するならば<sup>21)</sup>、en criant lapin 短い時間で、Envoye! さあ行こう!<sup>22)</sup>、envoyer la main 手を振る、être dû pour 準備ができてい、faire du pouce ヒッチハイクする、faire dur きちんとしていない、frette 寒さ<sup>23)</sup>、guenille 雑巾、J'ai l'estomac dans les talons. お腹が減った、J'aimerais ça aller ～したい、jaser 話す<sup>24)</sup>、jour de l'an 新年、laveuse 洗濯機、lumière 信号、maganée ひどい<sup>25)</sup>、magasinage 買い物、magasiner 買い物する、maringouin 蚊、minoune 中古車、mouiller 雨が降る<sup>26)</sup>、nettoyeur 洗剤、niaiseux 馬鹿な、pantoute 全く～ない<sup>27)</sup>、pareil それでも、pas fort 馬鹿な、quétaîne 流行遅れの、ramasser 片づける、relationniste 広報担当、sacoche ハンドバッグ、s'amancher 何とかする<sup>28)</sup>、se raplomber 回復する、sécheuse 乾燥機、s'endurer 我慢する、sorteux 外出好きの<sup>29)</sup>、tanner 邪魔する、tantôt また後で、taquiner le poisson 釣りをする、téléroman テレビドラマ

## 2. 南仏フランス語

a bisto de naz おおよそ<sup>30)</sup>、adichat さようなら、adiu こんにちは、atao こんな、bé ああ、bourses ナイロン袋(特に Roussillon 地方<sup>31)</sup>)、cagnas 猛暑<sup>32)</sup>、coustellou スペアリブ<sup>33)</sup>、débaucher 仕事を終える<sup>34)</sup>、décaniller はじく、ensuqué ヘトヘトの、espanté 驚いた<sup>35)</sup>、esquinter ダメにする、graillou 食事、malle (車の)トランク、pareil もしよかったら<sup>36)</sup>、péguer ベトベトする<sup>37)</sup>、pitchoun 子ども、poches ナイロン袋<sup>38)</sup>、qu'ès acó? それは何ですか?、s'esquinter 体を壊す、tè あれ<sup>39)</sup>、trempe 濡れた<sup>40)</sup>

## 3. スイス・フランス語

à tout' また後で、ça joue オークー<sup>41)</sup>、droit ちょうど<sup>42)</sup>、exmatriculer



退学させられる、huitante-deux 82 (特に Valais 地方と Fribourg で)、lessive 洗剤、lessiverie 洗濯部屋、moins quart 15 分前、natel 携帯電話<sup>43)</sup>、nonante 90、ou bien? ～ですか (疑問文の最後に付加される)、septante 70、souper 夕食<sup>44)</sup>、torrée<sup>45)</sup> ビクニック (特に Neuchâtel で)

### 3.2. 音声的変異形

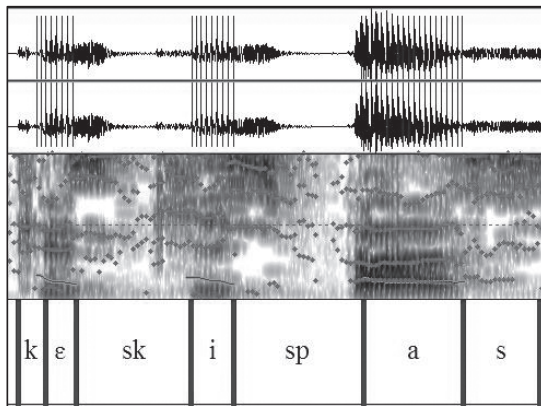
音声の面に目を向けると、以下のような変異形が観察される。まずケベック・フランス語では、dis-moi [dzimwa], petit [ptsi], tu vas [tsyva] に見られるような破擦音化 (t > ts, d > dz) が観察される<sup>46)</sup>。

スイス・フランス語では、arrivée [aʁive:], chérie [ʃeri:], fondue [födy:], garderie [gɑʁdʁi:], idée [ide:], joue [ʒu:], rue [ʁy:], vue [vy:] に見られるように、語末母音の伸長が顕著である。母音の伸長は、amie [ami:] や bleue [blø:] では、女性形の特徴にもなっている。vingt は語末子音 -t が発音される。paie [pej] あるいは sois/soit [swaj] のように、語尾に半母音 [j] が付加されるのもスイス・フランス語の特徴である。スイス・フランス語モジュールでは Neuchâtel と Vaud の出身者が出演しているが、前者では vélo [velɔ] のように語末に広い o の母音が見れる。Vaud 地方では、母音が伸長するだけでなく、半母音 [j] が付加され二重母音のようになる。例、année [ane:j], contrariée, [-e:j], gentille [-i:j], rencontrée [-ʁe:j], torée [tɔʁe:j]。

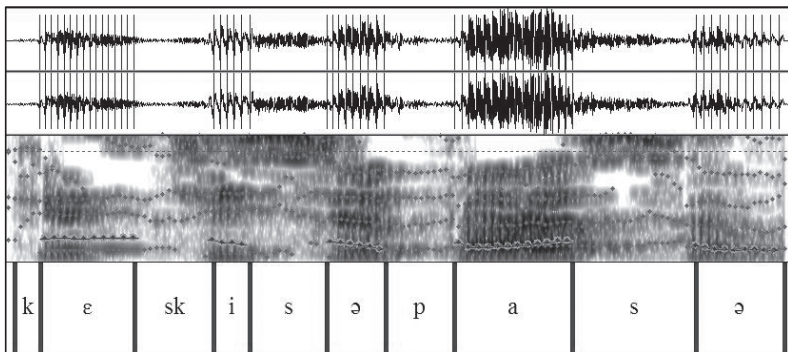
南仏フランス語では、avec が [ave] と発音され、gauche [gɔʃ], pauvre [pɔʁvɛ] の -au- の綴り字は、広い母音として実現される。また標準フランス語では広い e の母音になる単語が狭い母音で発音される。例、avais [ave], fais/fait [fe], français [fʁɑ̃se], mais [me], mets [me], parfait [paʁfɛ], partirai [paʁtɪʁe], plaît [ple], près [pʁe], sais [se], très [tʁe], vais [ve], voudrais [vudʁe], vrai [vʁe]。このほかに南仏フランス語の音声特徴としてしばしば言及されるものに、鼻母音の非鼻音化あるいは不完全な鼻音化がある<sup>47)</sup>。非鼻音化の例は、南仏語モジュールでは枚挙に暇がないほど頻繁に観察される。さらに南仏フランス語では、脱落性の e (e caduc, e muet) が脱落せずに母音として実現される。たとえば「16 場所についてたずねる」に出て

くる、Qu'est-ce qui se passe? 「どうしたのですか?」という文を、標準フランス語と南仏フランス語の両会話モジュールから抜き出し、Praatを使って音声分析してみると、南仏フランス語では e muet がいずれも明瞭に発音されていることがわかる。

標準フランス語会話モジュール



南仏フランス語会話モジュール



### 3.3. 統語論的変異形

最後に統語論の観点から観察する。南仏フランス語では以下の3つの特徴が指摘できる。① 主語 *ça* の省略。「02 感謝する」Ah Aurélie, comment va? 「やあ、オレリー、元気?」。② 代名動詞の使用。「02 感謝する」Ah! Je *me le suis* pensé! 「ああ、それを考えていた。」、「04 自己紹介する」Je vais *me* chercher un bout de melon, t'en veux? 「メロンを取りに行ってくるけど、要る?」。③ 複複合過去形の使用。「09 経験についてたずねる」Oh, *j'y ai eu été* dans le temps. 「ああ、ずいぶん前に行ったことがある。」。

南仏フランス語における主語人称代名詞の省略は広く知られた現象であり、南仏の地域的変異を扱った学習教材に盛り込む内容に相応しいと言える。他方、複複合時制形に関しては、Blanche-Benveniste (1997) が Caruthers (1994) の分析を引用し、複複合時制は複合時制の単なる変異ではなく、異なる動詞アスペクトの体系を構成し、「遠い不定の過去 (un passé éloigné et indéterminé)」を表すと指摘する。「09 経験についてたずねる」の文脈を見てみよう。場面はカフェで、リオネルとオレリーがコーヒーを飲みながら話している。オレリーがリオネルに尋ねる文から会話が始まる。T'as déjà fait les fêtes de Bayonne? 「バイヨンヌのお祭りに行ったことある?」。この質問に対するリオネルの回答部分に複複合時制形が現れる。Oh, *j'y ai eu été* dans le temps. Mais j'étais pitchoun et j'y suis jamais retourné depuis. 「ああ、ずいぶん前にね。でも小さかったし、それ以来行ってないよ。」。日本語訳からも分かるように、リオネルがバイヨンヌに行ったのは、ずいぶん前のこと (dans le temps) なのである。複複合時制形が「遠い不定の過去」を表すという解釈は、それなりに説得力がある。

スイス・フランス語では2つの統語的特徴が指摘できる。① *seulement* の付加による命令の婉曲化。「01 挨拶する」Ça marche, vas-y *seulement* puis on se retrouve à la cafét'. 「オーケー、行ってて、またカフェテリアで会いましょう。」。② *vouloir* + 不定法の迂言的未来形。「06 人にもものをあげる」tu *veux* jamais *devenir* riche 「一生お金持ちになれないよ。」。③ Preposition stranding の現象で特に前置詞 *avec* で多数みられる。「17 特徴についてたずねる」Ben dis, tu me prendras *avec*, j'espère! 「ちょっと、僕も一緒に連れ

てってくれるんだろうね!」、*「19好きなものについて述べる」* Et généralement, qu'est-ce que vous buvez avec? *「それから、(フォンデュと)一緒に何を飲みますか?」*<sup>48)</sup>。

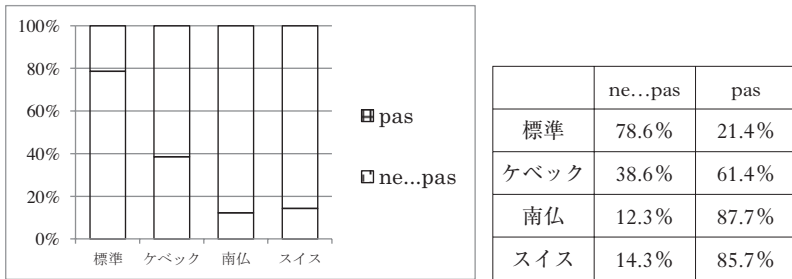
#### 4. フランス言語モジュールと言語規範

上節で、語彙・音声・統語のそれぞれのレベルで観察される地理的変異を見た。会話モジュールの場合、大学生が最初に学ぶ基礎レベルを学習目標に設定しているため、文体的な変異はあまり考慮する必要がないと言える。多くの会話モジュールが想定するように、目標言語は「学校教育に使用される(フィリピン語モジュール)」言語であり、「テレビやラジオ、新聞などのマスメディアや教育など(ロシア語モジュール)」で用いられ、「学校教育でも教えられマスコミでも普通に使われる標準的な(ヴェトナム語モジュール)」言語である。同じことは標準フランス語以外の3つの会話モジュールについても言える。それぞれがその地域の教育・マスメディアの中で用いられる、云わばその地域の標準的変種なのである。にも拘わらず、標準フランス語とそれ以外の3つの会話モジュールでは、他の要因が関与することで、言語変異の現れ方が複雑な様相を呈する。その要因こそ、話し手が持っている規範意識である。マルティネの挿話は大変興味深い<sup>49)</sup>。マルティネによれば、20歳～60歳のパリの中産階級に属する66人が、1941年に偶然一箇所に集まり、各人の母音体系を引き出す目的で作られた約50問の質問に答えた。ところが全く同じ答え方をした人は、そのうち二人と見られなかったのだ。つまり、千差万別な答えが暗示する言語差は、お互いの理解を妨げない限り、取りあげられることもなく、気づかれもしないわけである。言語共同体の構成員には皆が同じ言語を話しているという共同幻想がある。そのため発音や形態や語法の違いなどは、理解を妨げない程度の差であれば、意識にもものぼらず過ぎ去ってしまう。

しかしながら、一旦複数の慣用の間で葛藤が生じるようなことになれば、解決のためにしばしば言語規範<sup>50)</sup>が登場する。規範はいわば慣用間の競合関係を解消するための伝家の宝刀なのである。フランス語の言語規範と云えば、すぐに記述文法が頭に浮かぶ。なかでも *Bon Usage* (1980) 第

11 版はその典型である。「記述文法は当該の時代における人間集団の言語慣用を解説する。それはふつう「善き慣用 bon usage」、すなわち、うまく話したりうまく書こうと配慮する人々に恒常的な慣用を確認し記載するにとどまる」<sup>51)</sup> と Grevisse は述べている。とはいうものの、恒常的な慣用を確認するのは必ずしも簡単なことではない。たとえば、基本的なフランス語の文法事項でありながら、慣用上の葛藤が生じる卓近な例を見てみよう。

フランス語の初級文法の中で学習する動詞の否定形は、大概、ne + 動詞 + pas 型である。たとえば「私には分かりません Je ne sais pas」となる。ところが学習者は日常的なフランス語において、ne が脱落した否定形 Je sais pas に頻繁に出くわす。慣用は明らかに揺れている。どちらを使ったとしても、否定文であることに変わりはなく、理解が妨げられることもない。では、一体どちらを使えばよいのか。フランス語の 4 つの会話モジュールにおける ne...pas 型と pas 型の出現頻度は、以下ようになる。



標準フランス語が一つの言語規範を表すものであると仮定するなら、南仏とスイスは標準的規範から遠く、ne...pas 型の頻度がかかなり低く、pas 型が優勢である。Meisner が話し言葉フランス語の代表的コーパスである C-ORAL-ROM (44 万語) を分析したところ、否定形 2432 例の 71% で ne が脱落する<sup>52)</sup>。南仏フランス語とスイス・フランス語では ne の脱落率は、それ以上に高い。ところがケベック・フランス語の場合、pas 型が優勢であることは変わらないが、ne...pas 型も比較的多く現れる。

否定辞の *ne* の脱落について、4つのフランス語会話モジュールを比較対照してみよう。標準語モジュール以外の会話モジュールでは、40機能の半分はそれぞれが新しく作成したスキットである。それに対して残りの20機能は標準フランス語のスキットをそのまま採用している。ところが標準語のスキットを採用すると言いながらも、興味深いことに標準語のスキットにある *ne...pas* 型を、他の会話モジュールの作成者が *pas* 型に置き換えている場合と、置き換えていない場合がある。

否定辞 *ne* の脱落については多くの先行研究がある<sup>53)</sup>。Krassin (1994) は、現代フランス語文法の新たな進化を記述する書の中で、言語内的要因と言語外的要因を区別しつつ、*ne* が脱落する要因を以下のように説明する<sup>54)</sup>。

言語内的要因としては、① 1・2音節の動詞で、② 頻度の高い連続において、③ 人称代名詞 *je* の時に *ne* の省略が多く、④ イアトス位置で *ne* を保持し (*Tu n'as pas*)、⑤ 主節よりも従属節で、⑥ 直説法よりも接続法で *ne* の省略が多い、等を挙げる。他方、言語外的な要因としては、① 話し手が若いほど *ne* は脱落し、② 性別による明確な違いはなく、③ 特にパリ地域で *ne* が脱落する、と述べている。

確かに、標準語モジュールの *pas* 型を、それ以外の会話モジュールがそのまま採用した例では、動詞はどれも1・2音節であった (*c'est pas, il faut pas, t'as pas*)。

## 1. 標準語モジュールと同じ *pas* 型

- 05 謝る：標準 *C'est pas grave.* / ケベック *C'est pas si grave.* / 南仏 *Bon, c'est pas grave.*
- 13 数字についてたずねる：標準 *C'est pas vrai ?* / ケベック *Mais c'est pas vrai ?* / 南仏・スイス *C'est pas vrai ?*
- 22 状況についてたずねる：標準・ケベック・南仏・スイス *C'est pas vrai ?*
- 28 例をあげる：標準・ケベック *Il faut pas exagérer.* / 南仏・スイス *Faut pas exagérer.*

- 29 妥協する：標準・ケベック・南仏 T'as pas fait la vaisselle d'hier soir ? / スイス Tu as pas fait la vaisselle d'hier soir ?
- 29 妥協する：標準・ケベック・南仏・スイス Je suis pas ta bonne !
- 29 妥協する：標準・ケベック・南仏・スイス Écoute, c'est pas possible.
- 32 禁止する：標準・ケベック・南仏・スイス C'est pas interdit, ça, au moins ?

逆に、標準語モジュールの *ne...pas* 型を、他の会話モジュールがそのまま保持した例では、動詞は 1・2 音節以上の動詞もある。以下の例 *vous ne préférez pas, ne le réveillez pas* を参照。

## 2. 標準語モジュールと同じ *ne...pas* 型

- 20 好きな行動について述べる：標準・ケベック・南仏・スイス Ah bon, vous ne préférez pas que je vous aide ?
- 34 しないでくれと言う：標準・ケベック・南仏・スイス Non, mais, ne le réveillez pas.
- 37 助言する：標準・ケベック・南仏・スイス On n'y fait pas de progrès.

しかしながら Krassin (1994) の述べる要因だけでは、とても全ての例を説明し切れない。たとえば以下の例では、主語人称代名詞が *je* で、かつ動詞が 1 音節 (*je ne suis pas, je ne sais pas, je n'aime pas*) であるのに、標準語モジュールでは *ne* の脱落が起きていない<sup>55)</sup>。ところがケベック・フランス語、南仏フランス語、スイス・フランス語のモジュールでは、その *ne* が落ちているのである。標準語の基盤となるパリ地方で、特に *ne* が保持されるとは全く考えられない。

## 3. 標準語モジュールのみが *ne...pas* 型

- 18 意見を述べる：標準 À mon avis, ça ne marcherait pas. | ケベック・

南仏・スイス À mon avis, ça marcherait pas.

- 18 意見を述べる：標準 Alors là, je ne suis pas d'accord ! / ケベック・南仏・スイス Là, je suis pas d'accord !
- 18 意見を述べる：標準 Je ne sais pas... / ケベック・南仏・スイス Je sais pas...
- 20 好きな行動について述べる：標準 Et puis je ne suis pas très “club”. / ケベック Et puis je suis pas très “Club Med”. / 南仏 Et puis je suis pas très “club”. / スイス Et je suis pas très « Club Med ».
- 20 好きな行動について述べる：標準 Je n'aime pas tellement ça. / ケベック・南仏・スイス J'aime pas tellement ça.
- 35 しなくともよいと言う：標準 Ce n'est pas du tout obligatoire. / ケベック・南仏・スイス C'est pas du tout obligatoire.

さらに状況は複雑を極める。以下の例では、南仏とスイスだけが pas 型を選択し、ケベックは標準語モジュールと共に ne...pas 型を選択している。一方、南仏あるいはスイスだけが pas 型を選択した例もある。しかも動詞は全て短音節である。

#### 4. 南仏モジュールとスイスモジュールが pas 型

- 16 場所についてたずねる：標準・ケベック Je ne sais pas où je suis. / 南仏・スイス Je sais pas où je suis.
- 22 状況についてたずねる：標準・ケベック Mais tu n'as pas changé du tout ! / 南仏 Mais t'as pas changé du tout ! / スイス Mais tu as pas changé du tout !
- 24 比べる：標準・ケベック Et toi, tu n'as pas envie d'en acheter une ? / 南仏・スイス Et toi, t'as pas envie de t'en acheter une ?
- 26 理由を述べる：標準・ケベック C'est parce que je ne savais pas que ce serait si long. / 南仏・スイス Parce que je savais pas que ça serait si long.
- 26 理由を述べる：標準 Mais pour quelle raison ne m'as-tu pas préve-



- nue ? / ケベック *Mais pourquoi tu ne m'as pas avertie* / 南仏・スイス *Mais pourquoi tu m'as pas avertie ?*
- 26 理由を述べる：標準・ケベック *Pourquoi ne m'as-tu pas appelée hier soir ?* / 南仏・スイス *Pourquoi tu m'as pas appelée hier soir ?*
- 35 しなくともよいと言う：標準・ケベック *Ce n'est pas obligatoire de payer si cher ?* / 南仏 *On est pas obligé de payer si cher ?* / スイス *C'est pas obligatoire de payer si cher ?*

##### 5. 南仏モジュールあるいはスイスモジュールのみが pas 型

- 16 場所についてたずねる：標準 *Ça ne serait pas plutôt le Panthéon, que vous cherchez ?* / ケベック *Ça ne serait pas plutôt le Château Frontenac, que vous cherchez ?* / スイス *Ce ne serait pas plutôt le Château de Chillon, que vous cherchez ?* / 南仏 *Ça serait pas plutôt la basilique Saint Sernin, que vous cherchez ?*
- 32 禁止する：標準・ケベック・スイス *Ça ne m'étonne pas.* / 南仏 *Ça m'étonne pas.*
- 37 助言する：標準・ケベック・スイス *À votre place, je n'irais pas à Paris.* / 南仏 *À votre place, j'irais pas à Paris.*
- 34 しなくともよいと言う：標準・ケベック・南仏 *Ne vous inquiétez pas.* / スイス *Vous inquiétez pas.*

このように、ne の脱落に関する先行研究とその研究成果だけでは、会話モジュールの作成者が、標準語モジュールのスキットを採用すると言いながらも、何故このような形で ne...pas 型あるいは pas 型を選択したのかを説明できない。ne の脱落に関しては、標準語モジュールのスキット作成者も含め、モジュールの作成者たちの間に唯一の慣用が存在しているわけではなく、複数の慣用が許容されている。それを可能にしているのは、作成者一人一人の規範意識ではないかと思われる。

## おわりに

時が経つのは速いもので、TUFSS 言語モジュールが公開されてから10年以上になる。言語モジュールは、毎月コンスタントに200万ページビュー以上を記録するウェブページに成長した。開発者の一人としては望外の喜びである。

なかでも、英語会話モジュールについては、本書にもあるように、文部科学省科学研究費補助金(基盤研究B 課題番号24320106)「社会言語学的変異研究に基づいた英語会話モジュール開発」(代表者 関屋康 神田外語大学)の補助を受けて、東京外国語大学(斎藤弘子教授、吉富朝子教授、筆者)と神田外語大学(関屋康教授、矢頭典枝准教授、フィリップ・マーフィー准教授)の大学間協力によって、2014年10月25日現在で、アメリカ英語モジュール、イギリス英語モジュール、オーストラリア英語モジュール、ニュージーランド英語モジュール、カナダ英語モジュールが開かれ、目下、シンガポール英語モジュールも開発中である。

それぞれの言語モジュールは、監修にあたった研究者、スキット作成と修正を行った外国人教員と院生協力者、そして出演者とその補助者、ウェブデザイナーとプログラマーという、数多くの協力者たちの団結と努力の結晶である。当初は10年以上継続的に言語モジュールの開発が行われるなどとは夢にも思わなかったが、現在も定期的に利用して下さっている学習者の人たちのことを考えると、本事業を継続することの意義を今更ながらに再確認させられる。

## 注

- 1) プロジェクト概要は <http://www.coelang.tufs.ac.jp/> を参照。
- 2) <http://www.coelang.tufs.ac.jp/modules/>
- 3) <http://www.coelang.tufs.ac.jp/modules/en/dmod/>
- 4) 詳細は松本(2004)を参照。
- 5) 結城(2003)63-66。概念・機能シラバスを採用することの利点については結城(2003)54-55を参照。
- 6) 詳細は結城(2004)を参照。スペイン語4教材、中国語7教材、ドイツ語8教材、フランス語6教材、ポルトガル語1教材について、場面設定、機能シラバス、学習者のニーズ、操作性、語彙、発音等の観点から分析を行った。調査結

果は結城 (2003) 62-63 も参照。

- 7) 同上、112-113 参照。
- 8) たとえば Jakobson (1960) のコミュニケーションにおける言語機能を参照。
- 9) Charles A. Ferguson (1959) を参照。
- 10) ここでは敢えてフランス語の「標準語モジュール」と呼ぶことにするが、標準的変種においても様々な変異形が観察される。たとえば音声レベルにおける労作、A. Martinet et H. Walter (1973) を参照。
- 11) ここで問題となるケベック・フランス語は、Chicoutimi を含む Saguenay-Lac-St-Jean 地域のフランス語である。ケベック・フランス語モジュール開発では、ボストン大学の Luc Baronian 教授 (開発当時は Chicoutimi 大学) の協力を得ることができた。
- 12) 出演者の出身地である Neuchâtel と Vaud 地方の2つのスイス・フランス語で構成される。スイス・フランス語モジュール開発においては、ジュネーヴ大学の Isabelle Racine 准教授、早稲田大学の Sylvain Detey 准教授の協力が不可欠であった。
- 13) Hautes-Pyrénées 県の Bigorre 地方と Pyrénées-Orientales 県のフランス語。南仏フランス語モジュールでは、トゥールーズ大学の Jacques Durand 名誉教授と早稲田大学の Sylvain Detey 准教授の協力を得た。
- 14) 英語法には以下のものがある。balloune 風船、bine 豆、bye さよなら、canceler キャンセルする、C'est l'fun. 嬉しい、cipaille 魚のバイ、deal 商談、être en break 休憩する、gang 仲間、job 仕事、lift 送迎、luncher 昼食をとる、mop モップ、place 場所、sédulé 前もって決まっている、show コンサート、Tu es la bienvenue. どうってことないです
- 15) *Glossaire du parler français au Canada* (1968: 69) « canneberge ».
- 16) *Glossaire*, p. 99 « fermer à clef ».
- 17) *Glossaire*, p. 136 « fumée ».
- 18) *Glossaire*, p. 183 « sou, centième ».
- 19) *Glossaire*, p. 204 « ami intime ».
- 20) *Glossaire*, p. 310 « monter ».
- 21) *Glossaire*, p. 75 « ① en tant que, ② pourvu que ».
- 22) *Glossaire*, p. 323, intr. *Envoie, envoye donc*.
- 23) *Glossaire*, p. 354, frète « froid ».
- 24) *Glossaire*, p. 407, « conter ».
- 25) *Glossaire*, p. 430, *maganer* « malmener, affailir, détériorer ».
- 26) *Glossaire*, p. 466, « pleuvoir ».
- 27) *Glossaire*, p. 491, « pas du tout ».
- 28) *Glossaire*, p. 32, « s'arranger ».

- 29) *Glossaire*, p. 633, « sorteur ».
- 30) Moreux et al. (2000: 77) *abistodénas* « à vue de nez ».
- 31) Camps (1991: 21) Sachet en papier ou en plastique.
- 32) Moreux et al. (2000: 149) « soleil intense ».
- 33) Camps (1991: 36) Côté ou côtelette de porc décharnée. Moreux et al. (2000: 209).
- 34) Moreux et al. (2000: 224) « cesser le travail ». Rézeau (1999: 136) では “cesser le travail quotidien” として la Sarthe au Sud-Ouest と記載がある。
- 35) Camps (1991: 43) Espanter v.t. Effrayer.
- 36) Moreux et al. (2000: 405), « bien sûr, volontiers », — Vous prendrez l’apéritif ? — Pareil.
- 37) Camps (1991: 69) Coller, poisser. Moreux et al. (2000: 416). Rézeau (2001: 746-7) によれば Drôme, Haute-Alpes, Provence 等の広い地域で使用される。
- 38) Moreux et al. (2000: 449) « sac de papier ou de plastique dans lequel on met les achats ».
- 39) Moreux et al. (2000: 546) interjection proche de *Tiens!*.
- 40) Moreux et al. (2000: 563) « trempé ». Camps (1991: 92) Trempé. Moreux et al. (2000: 444) « petit garçon ». ただし Rézeau (2001: 1004) によれば Charente (nord-est), Centre, Franche-Comté さらに Drôme, Provence 等の広い地域で使用される。
- 41) Knecht (1997: 472) jouer は marcher, aller, convenir の意味。
- 42) Knecht (1997: 339) « exactement, tout à fait »
- 43) Knecht (1997: 529).
- 44) Knecht (1997: 673). Rézeau (2001: 303) によると、非常に広い地域で用いられる。
- 45) Knecht (1997: 704) « Repas en plein air où l’on consomme des saucissons et des pommes de terre cuits sous les cendres... ».
- 46) 二重母音化も頻繁に起きているが、これについては分析する余裕がなかった。今後の課題としたい。
- 47) Taylor (1996) が Aix-en-Provence で行った社会言語学的調査によると、非鼻母音化は学歴や中央指向等の言語外的要因に関係するという。ただし、ここで問題となる南仏フランス語は、プロヴァンス地方ではなく、ルシヨン地方のそれであるため、同様の傾向があるのかどうか分からない。
- 48) 前置詞 avec は標準フランス語においても、話しことばでは Stranding が頻繁に観察される。(例) Tu viens avec ? 「君も来る?」。Durand (1993: 260) によれば、Preposition stranding はカナダ・フランス語においても見られる。(例) Quelle heure qu’il a arrivé à ? 「何時に彼はそこに着いたの?」、Quoi-ce que tu

as parlé à Jean de ? 「君はジャンに何の話をしたの？」。

- 49) Martinet (1970) 邦訳 p. 207.
- 50) 川口 (2002) 参照。
- 51) Grevisse (1980) p. 28.
- 52) Meisner (2010) p. 1949.
- 53) Ashby (1976), Sankoff & Diane (1997), Krassin (1994), Hansen & Malderez (2000), Coveney (2002), Kawaguchi (2009), Meisner (2010).
- 54) Krassin (1994) pp. 15–16.
- 55) Meisner (2010: 1950) は人称代名詞の影響が ne の脱落に大きく影響すると主張する。また Krassin (1994) では je の時に ne の脱落が起きると言う。

#### 参考文献

- 海野多枝、川口裕司 (2010) 「ウェブ対応多言語マルチメディア教材と言語教育：『TUFS 言語モジュール』の開発事例」、*Japanese Studies Journal*, 27.1, Thammasat University, pp. 20–34.
- 川口裕司 (2002) 「言語にとって規範とは何か」、『語学研究所論集』第7号、東京外国語大学語学研究所、49–73 頁
- 小池生夫 (編集主幹) (2003) 『応用言語学事典』研究社
- ジャッケンドフ・レイ (郡司隆男訳) (2006) 『言語の基盤 脳・意味・文法・進化』岩波書店 (Ray Jackendoff (2003) *Foundations of Language, Brain, Meaning, Grammar, Evolution*, Oxford, Oxford University Press)
- ジョンソン・キース、ジョンソン・ヘレン (岡秀夫監訳) (1999) 『外国語教育学大辞典』大修館書店
- 辻幸夫 (2002) 『認知言語学キーワード事典』研究社
- 松本剛次 (2004) 「初級日本語教科書のシラバス分類と TUFS-D モジュールの設計試案及びその妥当性に関する考察」川口裕司・芝野耕司・峰岸真琴編『言語情報学研究報告 I TUFS 言語モジュール』、2004、21 世紀 COE プログラム「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」(83–93 頁) 東京外国語大学大学院地域文化研究科
- 結城健太郎 (2003) 「機能シラバスにおけるユーザーの視点から見た機能分類」、『外国語教育研究』第6号、53–67 頁
- 結城健太郎 (2004) 「D モジュール開発のための場面シラバスと機能シラバスに関する基礎調査」川口裕司・芝野耕司・峰岸真琴編『言語情報学研究報告 I TUFS 言語モジュール』、2004、21 世紀 COE プログラム「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」(75–81 頁) 東京外国語大学大学院地域文化研究科
- Ashby William J. (1976). The Loss of the Negative Particle ne in Parisian French, *Lingua* 39, pp. 119–137.

- Bento Margaret (1998). Une étude sociolinguistique des affriquées désonorisées en franco-québécois, *Revue québécoise de linguistique* 26/1, pp. 13–26.
- Blanche-Benveniste Claire (1997). La notion de variation syntaxique dans la langue parlée, *Langue française* 115, pp. 19–29.
- Blundell Jon A., Jonathan Higgins, Nigel Middlemiss (1982). *Function in English*. Oxford, Oxford University Press.
- Champs Christian (1991). *Dictionnaire du français du Roussillon*. Paris, Editions Bonneton.
- Coveney Aidan (2002). *Variability in Spoken French A Sociolinguistic Study of Interrogation and Negation*, Bristol, Elm Bank.
- Detey Sylvain, Isabelle Racine, Yuji Kawaguchi (2011). “Variation diatopique et continuum pédagogique multimédia: du lexique québécois à la phonologie suisse”, In Olivier Bertrand et Isabelle Schaffner (dir.), *Variétés, variations & formes du français*, pp. 427–448.
- Durand Jacques (1993). “Sociolinguistic variation and the linguist”, In Carol Sanders (ed.), *French Today, Language in its social context* (pp. 257–285). Cambridge, Cambridge University Press.
- Ferguson Charles A. (1959). Diglossia, *Word* 15/2, pp. 325–340.
- Grevisse Maurice (1980). *Le bon usage: grammaire française*, 11<sup>e</sup> éd., Bruxelles, De Boeck: Duculot.
- Jakobson Roman (1960). « Closing Statement: Linguistics and Poetics », In Thomas A. Sebeok (ed.), *Style in Language* (pp. 350–377). Cambridge, M.I.T. Press.
- Hansen Anita Berit et Isabelle Malderez (2000). La négation en français parlé — une enquête en région parisienne, *Le français parlé*, København, Museum Tusulanum Press, University of Copenhagen, pp. 45–63.
- Kawaguchi Yuji (2009). Particules négatives du français: *ne, pas, point, mie* — Un aperçu historique —, *Le français d'un continent à l'autre. Mélanges offerts à Yves Charles Morin*, Presses de l'Université Laval, pp. 193–210.
- Kawaguchi Yuji, Susumu Zaima, Toshihiro Takagaki, Kohji Shibano, Mayumi Usami (eds.) (2005). *Linguistic Informatics — State of the Art and the Future*, Amsterdam, John Benjamins.
- Kawaguchi Yuji, Makoto Minegishi, Jacques Durand (eds.) (2009). *Corpus Analysis and Variation in Linguistics*, Amsterdam, John Benjamins.
- Knecht Pierre (sous la dir.) (1997). *Dictionnaire suisse romand: particularités lexicales du français contemporain*, Carouge-Genève, Editions Zoé.
- Krassin Gundrun (1994). *Neuere Entwicklungen in der französischen Grammatik und Grammatikforschung*, Tübingen, Max Niemeyer.

- La Société du parler français au Canada (1968). *Glossaire du parler français au Canada*, Québec, Les Presses de l'Université Laval.
- Martin Pierre (2002). Le système vocalique du français du Québec de l'acoustique à la phonologie, *La Linguistique* 38/2, pp. 71–88.
- Martinet André et Henriette Walter (1973). *Dictionnaire de la prononciation française dans son usage réel*, Paris, France-Expansion.
- Martinet André (1970). *Éléments de linguistique générale*, Paris: Armand Colin. (『一般言語学要理』1972年 三宅徳嘉訳 岩波書店)
- Meisner Charlotte (2010). “A Corpus Analysis of Intra- and Extralinguistic Factors triggering *ne*-Deletion in Phonic French”, In F. Neveu et al. (éds.), *Congrès Mondial de Linguistique Française* (pp. 1943–1962). CMLF 2010.
- Moreux Bernard et Robert Razou (2000). *Les mots de Toulouse, Lexique du français toulousain*, Toulouse, Presses Universitaires du Mirail.
- Poirier Claude (sous la dir.) (1985). *Dictionnaire du français québécois*, Sainte-Foy, Presses de l'Université Laval.
- Rézeau Pierre (1999). *Variétés géographiques du français de France aujourd'hui Approche lexicographique*, Bruxelles, Duculot.
- (2001). *Dictionnaire des régionalismes de France: géographie et histoire d'un patrimoine linguistique*, Bruxelles, Duculot.
- Sankoff Gilliam et Vincent Diane (1977). L'emploi productif du *ne* dans le français parlé à Montréal, *Le Français Moderne* 45, pp. 243–256.
- Stroh Hans (1971). Remarques sur l'emploi du pronom personnel sujet en rouergat moderne, *Revue de Linguistique Romane* 35, pp. 271–278.
- Taylor Jill (1996). La dynamique des voyelles nasales à Aix-en-Provence, *La Linguistique* 32/1, pp. 79–90.
- Wilkins David A. (1976). *Notional Syllabuses*, Oxford, Oxford University Press (D. A. ウィルキンズ、島岡丘訳、(1984)『ノーショナルシラバス 概念を中心とする外国語教授法』、桐原書店)
- Xavier Ravier (1991). “347. Okzitanisch: Arealinguistik (Les aires linguistiques)”, *Lexikon der Romanistischen Linguistik (LRL)*, G. Holtus, M. Metzeltin, Ch. Schmitt (Hrsg.), Band V.2, Tübingen, Max Niemeyer Verlag, pp. 80–105.